

12月31日 マタイによる福音書2章1～12節

説教題：「とりが鳴く 東に見ゆる 訪ね人

そはいかばかり めでたき宝」

大晦日ということで、説教題は和歌風に仕立ててみました。聖書の情景でありながら聖書的な言葉を使うことなく、それでもしっかりと東からくる博士のことが想像できるのではないのでしょうか。……自画自賛はこれぐらいにしておきましょう。

この和歌の枕詞である「とりが鳴く」という言葉は、東という言葉に係る枕詞で、鶏が鳴く様子以外にも、和歌を詠む人々から見て「東の国の人の言葉はとりが鳴いているかのようだ」という意味があったようです。現代の感覚で言えば、沖縄の高齢の方々の方言を私たちが聞き取れないような感覚でしょうか、後に江戸や名古屋と呼ばれる東の方角から来た人々が方言で喋る様子を「とりが鳴く」と表現したそうです。

イエス様の時代も、人々にとって文化と宗教の中心となるのはエルサレムであり、その東の方角から来る人々は「よそもの」という意識があったことでしょう。だからこそ、今日の個所で「東から来た博士たちによって王が生まれた知らせがもたらされる」ことは、「自分たちよりも信仰から遠い人々によってメシアのことを教えられる」ということを意味しました。ユダヤ人たちにとってとても衝撃的で、そしてある意味屈辱的な出来事だったのです。

今日の個所でイエス様の誕生に際して駆けつけた三人の博士たちは、イエス様がメシアであることを、やがて人々を導く王となることを証しするという大切な役目を果たしました。「東からの尋ね人は、どれほどの宝を持ってきたのだろうか」、私たちが生誕劇で見たその光景が確かに幼子イエス様の元に起こった出来事なのです。ただ、そのように博士たちは宝物を持ってきたのですが、イエス様にとって捧げられたのはそのような宝物だけではありません。それは、イエス様のもとに集う彼ら自身がイエス様にとっては宝そのものだったのです。ユダヤ人という一つの民族だけではなく、東の方から来た外国人たちをも分け隔てをすることなく、イエス様は王となって導くのです。どのような人にとっても、イエス様は王であり、神様はその人の神様なのです。そのような意味もあり、いくつもの絵画において三人の博士は、白人・黒人・黄色人種のように、一つの人種ではない人々として描かれています。東から来た、よそ者であるはずの博士たちが、イエス様の誕生を共に祝い、共にイエス様に導かれながら生きるようになる、そのような意味が込められているのです。

エルサレムに住んでいる人だけ、たった一つの民族だけを大切にする「土地神」のような存在などではなく、どのように場所に住む人も、どのような肌の色の人も、どのような時代を生きる人をも、すべての人を愛して、すべての人に導きを与える、そんな慈しみ深い方が私たちの神様なのです。その知らせが、東の方から、外国人を用いて知らされたのです。博士たちが宝物をもって来た先にはイエス様がいて、そしてイエス様はそのようにメシアの誕生を自分のことのように喜んでくれる一人一人のことを宝物として、慈しんで愛を注いでくれるのです。はるか東の方角、海を越えて東の極みにいる私たちにも、この国のさらに東に住む私たちにも、そのイエス様の愛が向けられているのです。時を超えて、場所を超えて、どのような時も、どのような人にも愛と慈しみを注いでくれる、その豊かな神様の恵みに生かされながら、明日から始まる新たな一年も、共に歩いていきましょう。

今日の説教箇所：マタイによる福音書2章1～12節

- 1:イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。そのとき、占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来て、言った。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人々も皆、同様であった。王は民の祭司長たちや律法学者たちを皆集めて、メシアはどこに生まれることになっているのかと問いただした。彼らは言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者がこう書いています。『ユダの地、ベツレヘムよ、／お前はユダの指導者たちの中で／決していちばん小さいものではない。お前から指導者が現れ、／わたしの民イスラエルの牧者となるからである。』」そこで、ヘロデは占星術の学者たちをひそかに呼び寄せ、星の現れた時期を確かめた。そして、「行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせしてくれ。わたしも行ってみよう」と言ってベツレヘムへ送り出した。彼らが王の言葉を聞いて出かけると、東方で見た星が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった。学者たちはその星を見て喜びにあふれた。家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。ところが、「ヘロデのところへ帰るな」と夢でお告げがあったので、別の道を通って自分たちの国へ帰って行った。